

(特研様式5)

所属長印

早稲田大学総長 殿

2009年 4月 10日

所 属 国際教養学部

資 格 教授

氏 名 近藤真理子

印

特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題：韻律単位の認識と発話リズム制御との関係：音声自動認識装置への応用
2. 研究期間：2008年10月1日 ～ 2009年3月31日
3. 研究場所(国/都市・機関名)：
オーストラリア ブリスベン Department of Languages and Linguistics, Griffith University
早稲田大学
4. 研究成果概要(2,000字以内)：

この特別研究期間は、現在科学研究費の助成を受けている『第二言語の韻律習得の音響的考察とモデル化』の研究を中心とし、合わせて新しい分野、とくに脳科学と言語習得、心理言語学への造詣を深め、新しいソフトウェアに習熟することに努めた。

第二言語の韻律習得の音響的考察とモデル化の研究に関しては、前半に滞在したオーストラリアのグリフィス大学日本語学科の協力を得、日本留学から帰ってきた中級レベルの学生を被験者として、日本語の発話を録音した。また一時帰国中に、早稲田大学国際教養学部の日本語を母語とする学生を被験者とし、英語話者との比較のための日本語の発話と第二言語としての英語の発話を収録した。オーストラリア英語話者と日本語話者の発話データは、前年度録音済みのアメリカ英語話者のデータとともに分析を行った。

データを分析した結果、英語話者の日本語発話においては、単語レベルとフレーズレベルで、異なる音声習得上の特徴が見られた。単語レベルでは、ほとんどの英語話者は日本語の平板型アクセントのようなアクセント核を持たない音韻単位の産出ができないことが確認された。また英語話者の、語アクセントの具現方法において、大別して二つの傾向が見られた。日本語の語アクセント産出において、ピッチ変化を中心にアクセントを表す英語話者と、ピッチよりも音圧を主として語アクセントを表す話者である。前者は日本語母語話者と同様に、主にピッチを用いてアクセントを表しているが、ピッチ幅の増加が日本語話者の語アクセントのピッチの増加に比べて大きい。一方後者は、ピッチ変化をまったく使わずに、語アクセントを表す傾向がある。このグループの話者の場合、ピッチの増加をまったく使わない分、アクセント核が置かれた母音の音圧が高くなり、母音の継続時間が長くなった。母音長が伸びることで発話のモーラリズムが崩れるため、コミュニケーションに影響する可能性は高いが、このグループの話者はもうひとつの語彙弁別機能である語アクセント位置を優先させていると考えられる。また両グループの話者とも、フレーズの発話にもフレーズアクセントではなく、語アクセントを用いる傾向がみられた。

※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報(学術年鑑 Web)のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで(tokkenseika@list.waseda.jp)ご提出くださるようご協力をお願いします。

